

# 実習施設における実習指導者によるスーパービジョン/ 実習指導に関する基礎的研究

## (その3): 実習生に対する質問紙調査を基に

横山 智美\*・山田 真由美\*・井上 由起\*・松永 公隆\*  
山田 勝美\*\*・山頭 照美\*・飛永 高秀\*

### A Fundamental Study of the Supervision/ Teaching of Social Work Field Practice (Part 3) : On the Analysis of the Questionnaire to the Students

Tomomi YOKOYAMA, Mayumi YAMADA, Yuki INOUE, Kimitaka MATSUNAGA

Katsumi YAMADA, Terumi YAMAGASHIRA, Takahide TOBINAGA

#### 要 約

本研究では、とりわけ実習指導者のスーパービジョン/実習指導に焦点をあてた基礎的研究と位置づけ、ケーススタディ的にA私立大学を対象として、社会福祉士養成における配属実習科目として設定されている「社会福祉援助技術現場実習」と、A大学において基礎実習として位置づけている「社会福祉実習Ⅰ」を受講する学生への質問紙調査をもとに、実習中の実習指導者によるスーパービジョン/実習指導の実態を把握する。その実態から、実習中のスーパービジョン/実習指導を展開していく上で、現在どのような課題があるのかということについて検討していくことを目的とした。その結果、①スーパービジョン/実習指導の実施状況から、実施回数が多いほど、学生は「適当」と評価し、量的にもスーパービジョン/実習指導を求めていること、②実習中のスーパービジョン/実習指導内容から、社会福祉実習においては導入教育としての基礎実習と、資格制度にかかわる「社会福祉援助技術現場実習」における実習指導の特性があり、後者のほうがよりソーシャルワークを意識した実習になっている事が明らかになったと同時に、対人援助を学ぶ基本的姿勢をふまえた基礎実習の必要性が示唆された。学生の学びの過程において実習指導教育のあり方を模索していくうえで、現場と大学との協働、つまり相互の共通理解と指導体制の確立は不可欠であり、さらに、学生のスーパーバイザーとしての姿勢と、教員や実習指導者の役割、実習タイプの特性を活かしたスーパービジョン/実習指導の展開の仕方について具体化していくことが、今後の検討課題となった。

\* 長崎純心大学    \*\* 山梨立正光生園

**キーワード:** 社会福祉援助技術現場実習 基礎実習 実習指導者 学生  
スーパービジョン/実習指導

## I 研究の意義と目的

近年の社会福祉士養成課程の動向を見るに、2008年には「社会福祉士および介護福祉士法」が改正され、社会福祉士および介護福祉士の定義の見直しや、介護福祉士を中心とした国家試験のあり方に関する見直しが見直しがなされることとなった。

とりわけ社会福祉士養成カリキュラムにおける「相談援助実習」に焦点をあててみると、養成校 実習生 実習先との三者の協議が必要となるなど、より充実した実習指導が求められるようになった。加えて、教員要件の見直しとして、実習・演習を担当する教員は、①5年以上の相談援助業務の経験を有する社会福祉士、②5年以上の実習・演習の教育経験を有する者、又は③実習・演習教員の講習会を受講している者その他準ずる者をおくことが定められるとともに、実習指導者の要件の見直しとして、実習施設における実習指導者は、3年以上の相談業務の経験を有する社会福祉士であって、実習指導者講習会を受講している者をおくこととすることが定められることとなった。すなわち、実習教員・実習指導者が実習指導を行ううえで一定の経験だけでなく、知識・技術が必要になったという意味だけでなく、実習指導の内容が求められるようになったことを意味する。教員の講習あるいは実習指導者の講習への参加が問われてきたのは、まさにそういった意味が付与しているのである。

では、実習現場あるいは教育現場におけるスーパービジョン/実習指導は現在どのようなかたちで実施されているのであろうか。われわれは、2009年に社会福祉実習の訪問時における養成校(大学教員)のスーパービジョン/実習指導に焦点をあて、ケーススタディ的に、A私立大学の学生を対象に、社会福祉士養成における配属実習の科目として設定されている「社会福祉援助技術現場実習」を受講する学生への質問紙調査をもとに、実習訪問時におけるスーパービジョン/実習指導の実態を把握しながら、実習指導の当該大学における課題について検討していくことを目的として調査を実施した。その結果、A大学のスーパービジョン/実習指導の実態から、①実習生は1回の訪問では物足りなさを感じていること、②実習訪問は、約40%近くが事前学習における実習指導クラス担当者外であること、③スーパービジョン/実習指導の内容は1回と2回で内容が異なることなどが明らかとなり、配属実習におけるスーパービジョン/実習指導の課題として、実習・事前事後、あるいは過去の実習経験という連続線で配属実習を捉えつつ、事前・事後の指導教員と情報の共有をおこないながら、訪問時におけるスーパービジョン/実習指導を行う必要があることなどが確認された。

一方、実習先における実習指導者からのスーパービジョン/実習指導の実施状況はどうであろうか。荒川ら(2003)は、実習指導者による実習指導/スーパービジョンが、実習生の満足度にもどのような影響を及ぼしたか明らかにすることを目的として、四年制大学の学生151名を対象に

質問紙による調査を実施した。その結果、実習生の満足度に影響を及ぼしたものは「業務内容についての指導」と「スーパーバイザーの支持的関わり」であることが実証的に示唆されているものの、実施状況や課題などの状況について焦点が当てられておらず、まずはそういった基礎的な状況把握から研究を始めていく必要があるだろう。

そこで本研究では、とりわけ実習指導者のスーパービジョン/実習指導に焦点をあてた基礎的研究と位置づけ、ケーススタディ的に A 私立大学を対象として、社会福祉士養成における配属実習科目として設定されている「社会福祉援助技術現場実習」と、A 大学において基礎実習として位置づけている「社会福祉実習Ⅰ」を受講する学生への質問紙調査をもとに、実習中の実習指導者によるスーパービジョン/実習指導の実態を把握しながら、スーパービジョン/実習指導を展開していく上で、現在どのような課題があるのか、そこにある課題は何かを探索的に検討していくことを目的とする。

なお、本稿で使用する「スーパービジョン/実習指導」という用語については、わが国においては「実習指導」と「スーパービジョン」とは、一般的に明確な区別がなされていない傾向にあることから、用語の明確な区別はさけ、ここでは「スーパービジョン/実習指導」という両義的な表現を使用することとする。

## Ⅱ 研究対象及び研究方法

研究対象は、長崎県にある A 私立大学（以下、A 大学とする）において2009年度に「社会福祉実習Ⅰ」「社会福祉援助技術現場実習」を2009年度履修中の実習生121名を対象とし、自計式の質問紙調査を実施した。調査時期は、それぞれの実習がほぼ終了した直後の第1回目の実習指導の授業時2009年9月28日～10月2日に実施し、101票が回収された（回収率84.0%）。

質問項目については、実習生の基本的属性に加え、「スーパービジョン/実習指導の形態」「実施状況」「スーパービジョン/実習指導で印象に残っていること」「スーパービジョン/実習指導で困ったこと」などについて尋ねた。

分析方法は、各項目の分布状況を明らかにするとともに、項目ごとの関連要因について、「実習タイプ」を基本軸としながら、クロス表にもとづく $\chi^2$ 検定などを行い、探索的に分析を行った。

## Ⅲ 結果

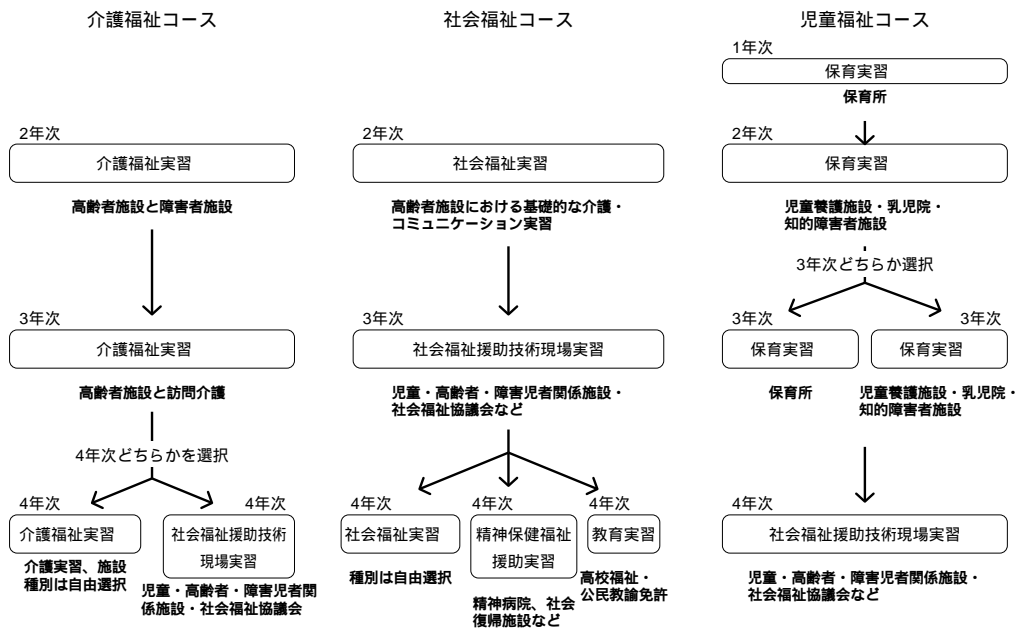
### 1. A 大学の实習指導体制

#### (1) 全体の概要

まずは、調査対象である長崎県 A 大学における実習指導体制について、概略的に述べておく。A 大学は、1学部5学科で構成、福祉を学ぶことができる学科は現代福祉学科である。現代

福祉学科の定員は、2006年度～2007年度は80名、2008年度～2009年度は70名、男性は1学年7～8名程度である。また、現代福祉学科には社会福祉コース、保育士養成課程(定員20名)、介護福祉コース(定員20名)があり、学生の志向性に沿った教育カリキュラムが設定されている。

2009年度における実習体制については、図Ⅲ-1に示すとおりであり、社会福祉コース、保育士養成課程、介護福祉コース各コースにおいて資格を取得するための実習が設定されているが、いずれのコースに属していても、社会福祉援助技術現場実習の履修が可能となっている。ただし、履修年次がコースによって異なり、社会福祉コースは3年次、保育士養成課程、介護福祉コースは4年次に履修することとなっている。A大学では、社会福祉士をめざす第一歩として基礎的な生活の支援を通じた対人関係形成の学習を中心とする「社会福祉実習Ⅰ」を基礎実習と位置づけ、2年次夏期に9日間の高齢者施設での実習、その事前・事後学習として「基礎介護実習指導」の履修を同時に義務づけている(カリキュラム改正に伴い、2010年度より「社会福祉実習Ⅰ」を「基礎介護実習」に改める)。A大学では、この基礎実習を導入教育として位置づけ、ここでの学習成果を社会福祉士指定科目である「社会福祉援助技術現場実習」へ結び付けている。なお、保育士養成課程、介護福祉コースにおいては2～3年次にそれぞれ「保育実習」、「介護福祉実習」を行うことで、一部をそれとみなしている。



図Ⅲ-1 A大学における実習の流れ

(2) 社会福祉現場実習の教育カリキュラムの概要

ここで、社会福祉援助技術現場実習の概要について、概略的に説明しておく。2009年度において、A大学では、指導要綱に基づき、実習目標、実習達成課題を設定している。また、社会福祉

援助技術現場実習（配属実習、180時間）の、A大学における実習期間は、原則として夏期休暇中（8月上旬～9月下旬）で、同一の施設において1日8時間勤務（休憩を含めない）、23日間（実働180時間以上）を行うこととしている。また、配属実習を行なうためには、事前学習として60時間、事後学習として30時間、社会福祉援助技術現場実習指導を実施している。

なお、以下より、「社会福祉実習Ⅰ」を「実習Ⅰ」、「社会福祉援助技術現場実習」を「現場実習」とする。

## 2. 調査対象者の基本属性

調査対象者の基本属性であるが、表Ⅲ-1に示すとおり、「性別」は「男性」が10人（9.9%）、「女性」が91人（90.1%）であり、A大学の特徴が表れている。「実習タイプ」は「実習Ⅰ」が38人（37.6%）、「現場実習」が63人（62.4%）であった。「学年」は、「2年生」が37人（36.6%）、「3年生」が34人（33.7%）、「4年生」が29人（28.7%）の順に多く、「コース」は「社会福祉コース」が72人（71.3%）で、「実習先分野」は「高齢者福祉分野」が64人（63.4%）と最も多かった。「実習先分野」に関して「高齢者福祉」が最も多いのは、A大学が「実習Ⅰ」の実習施設を高齢者福祉関連施設としていることが影響している。

表Ⅲ-1 調査対象者の基本的属性

項目	度数	%
性別 (n = 101)		
男性	10	9.9
女性	91	90.1
実習タイプ (n = 101)		
実習Ⅰ	38	37.6
現場実習	63	62.4
学年 (n = 100)		
2年生	37	36.6
3年生	34	33.7
4年生	29	28.7
コース (n = 101)		
社会福祉コース	72	71.3
児童福祉コース	14	13.9
介護福祉コース	15	14.9
実習先分野 (n = 101)		
児童福祉分野	10	9.9
障害児・者福祉分野	22	21.8
高齢者福祉分野	64	63.4
地域福祉分野	5	5.0

## 3. スーパービジョン/実習指導の実施状況と実施回数に関する意見

### (1) スーパービジョン/実習指導の実施回数と学生の満足度

ア) 学生が実習指導者によるスーパービジョン/実習指導をどの程度受けてきたかということについて、「ほぼ毎日」、「1週間単位」、「実習期間単位」、「オリエンテーションと最終の反省会程度」、「ほとんど行っていない」、「その他」の6つの選択肢を用いてたずねた（表Ⅲ-2参照）。実施状況について最も多かった回答は「ほぼ毎日」42人（42.4%）であった。次いで、「実習期間単位（実習期間中に何回か実施）」19人（19.2%）、「1週間単位」14人（14.1%）となっており、ばらつきがみられた。

イ) 次に、スーパービジョン/実習指導の実施回数について、「少ない」「適当」「多い」の3件法でたずねたところ、「適当」と答えた実習生が75人（75.8%）であった。

実施回数にばらつきがあるにもかかわらず、約8割の学生が「適当」と回答している。そこで、

学生の満足度についてさらに具体的に検討するため、①実施回数、②実習タイプの2つについて、関連性をみていきたい。

表Ⅲ - 2 スーパービジョン/実習指導の実施状況

項目	度数	%
ア) スーパービジョン/実習指導の実施状況		
1. ほぼ毎日	42	42.4
2. 1週間単位	14	14.1
3. 実習期間単位	19	19.2
4. オリエンテーションと最終の反省会程度	7	7.1
5. ほとんど行っていない	12	12.1
6. その他	5	5.1
合計	99	100.0
イ) スーパービジョンの実施回数		
1. 少ない	22	22.2
2. 適当	75	75.8
3. 多い	2	2.0
合計	99	100.0

(2) 関連要因の分析

① 「実施状況」と「実習回数に関する意見」との関連性について

実習回数に関して、実習生がどのような意見をもっているのか、「少ない」、「適当」、「多い」の3件法でたずねた。表Ⅲ - 3は、実施状況とのクロス集計をした結果である。「ほぼ毎日」と回答した学生のうち40人(95.2%)が、また、「一週間単位」と回答した学生のうち13人(92.9%)

表Ⅲ - 3 ア)SV 実施状況と イ)SV の実施回数のクロス表

		ア) SV 実施状況						合計
		ほぼ毎日	1週間単位	実習期間単位	オリエンテーションと反省会程度	ほとんど行っていない	その他	
イ) SV の実施回数	少ない		1 7.1%	8 42.1%	4 57.1%	8 66.7%	1 20.0%	22 22.2%
	適当	40 95.2%	13 92.9%	11 57.9%	3 42.9%	4 33.3%	4 80.0%	75 75.8%
	多い	2 4.8%						2 2.0%
		42 100.0%	14 100.0%	19 100.0%	7 100.0%	12 100.0%	5 100.0%	99 100.0%

が「適当」と答えていることから、実施回数が多いほど「適当」と感じており、学生は実習中に量的にもスーパービジョン/実習指導を受けることを求めているといえる。このことから、スーパービジョン/実習指導の実施において質的な効果が求められるだけでなく、学生が抱える不安や悩みに対してタイムリーに解決できるよう、量的にも確保することがのぞまれるといえよう。また、実習をすすめていくうえで、一週間という単位が、学生自身において実習を展開していく一つの目安となっていることも考えられる。

しかし、「オリエンテーションと反省会程度」と回答した学生のうち3人(42.9%)が「ほとんど行っていない」と回答した学生のうち4人(33.3%)が、その実施状況を「適当」と評価していることについて、どのような関連があるか明らかにできていないが、学生のなかでも、スーパーバイザーとしてスーパービジョン/実習指導を受ける意味や必要性を理解しているかという点に今後注目していく必要があるといえる。

②「実習タイプ」と「実施回数に関する意見」との関連性

表Ⅲ-4は、実習タイプとのクロス集計をした結果である。「実習タイプ」と「実施回数に関する意見」について、ほぼ同率の結果となり統計的に有意差はみられなかった。

「実習Ⅰ」と「現場実習」では実習段階や実習期間に違いはあるが、実習のタイプに関わらず、実習中のスーパービジョン/実習指導が必要であること、学生は回数が少ないよりは多いことを望んでいることが明らかとなった。学生は、スーパービジョン/実習指導を受けることで、実習指導者が自分に関心を持ってくれているという実感や安心感を得たいという思いを持っていることが推察できる。

表Ⅲ-4 実習タイプとSVの実施回数のクロス表

		問1イ) SVの実施回数			合計
		少ない	適当	多い	
実習タイプ	現場実習	15 24.2%	46 74.2%	1 1.6%	62 100.0%
	実習Ⅰ	8 21.1%	29 76.3%	1 2.6%	38 100.0%
合計		23 23.0%	75 75.0%	2 2.0%	100 100.0%

4. 実習期間中に受けたスーパービジョン/実習指導内容について

表Ⅲ-5は、学生が実習中に受けたスーパービジョン/実習指導の内容について、「受けた」「受けなかった」の選択肢を用いてア)～ノ)までの25項目をとりあげ、「実習Ⅰ」と「現場実習」の実習タイプごとに集計を行った結果である。

まず、実習中に行った実習指導の内容の全体状況をみると、「受けた」との回答が多かった項目は、「ク.利用者理解」96人(96.0%)、「サ.利用者の特性理解」97人(97.3%)が9割を

越え、次いで「テ・施設・機関の機能」89人(89.0%)であった。「受けた」の回答が最も少なかったのは「チ・面接技術」15人(15.0%)であり、次いで「コ・他の実習生との関係」20人(20.0%)となった。

次に、実習タイプとの実習指導内容関連性をみると、「キ・自分自身の援助の傾向・くせ(自己覚知)」については「現場実習」では「受けた」40人(64.5%)、「受けなかった」22人(35.5%)に対し、「実習Ⅰ」では「受けた」13人(34.2%)、「受けなかった」25人(65.8%)であり、実習のタイプによる統計的な有意差がみられた( $\chi^2_{(1)}=8.7$  ,  $p<.01$ )。

また、「ス・ニーズ把握」について「現場実習」では「受けた」52人(83.9%)、「受けなかった」10人(16.1%)、「実習Ⅰ」では「受けた」19人(50.0%)、「受けなかった」19人(50.0%)であった( $\chi^2_{(1)}=13.1$  ,  $p<.01$ )。

「タ・援助計画」についても「現場実習」では「受けた」34人(54.8%)、「受けなかった」28人(45.2%)に対し、「実習Ⅰ」では「受けた」11人(28.9%)、「受けなかった」27人(71.1%)となり、統計的な有意差が認められた( $\chi^2_{(1)}=6.4$  ,  $p<.05$ )。その他「ツ・社会資源の活用・開発」、「ト・法律・制度」についても統計的な有意差がみられた。

一方で、「ウ・実習生としてふさわしい服装」、「エ・実習生としてふさわしい態度」、「オ・実習中の健康管理について」、「シ・基本的な生活支援(介護技術)」については、「現場実習」よりも「実習Ⅰ」において「受けた」という回答が上回っていた。

以上の結果から、「ク・コミュニケーション」や「サ・利用者の特性理解」、「テ・施設・機関の機能」といった項目は、どちらの実習タイプにおいても共通して指導を受けており、実習という実感と気づきの貴重な場において、学生が福祉実践者としての学びを深めるという点で、継続的な学びのポイントとなっていることがわかった。

また、「キ・自分自身の援助の傾向・くせ(自己覚知)」、「ス・ニーズ把握」、「タ・援助計画」、「ツ・社会資源の活用・開発」、「ト・法律・制度」の項目については、「実習Ⅰ」に比べて「現場実習」の方が「受けた」という回答が多かったことにより、学生は「実習Ⅰ」よりも「現場実習」のほうが有意にソーシャルワークをより意識したスーパービジョン/実習指導を受けていることが明らかとなった。A大学においては、「実習Ⅰ」と「現場実習」いずれの実習タイプも実施している実習先もあり、これには導入教育としての「実習Ⅰ」に対して実習を受け入れる現場の理解が得られていることがうかがえる。また、「現場実習」において学生自身がこれまでの実習の学びや自己に対する気づきをふまえ、それらを意識して実習に臨み、指導を受け止めていく過程を経験しているということも推察できる。つまり、すでに基礎実習である「実習Ⅰ」においてもソーシャルワーカーとしての学習が始まっていると捉えることができる。

したがって、「実習Ⅰ」が上回った「ウ・実習生としてふさわしい服装」、「エ・実習生としてふさわしい態度」、「オ・実習中の健康管理について」という項目は、管理的指導内容であると同時に、それらがなぜ必要であるかということが学生自身に問いかけられ、そこに他者の存在を意識することから、対人援助者としての自己を模索していく入り口になるものとして重要な意味を



もつ。さらに、「シ・基本的な生活支援（介護技術）」の項目は、利用者の訴えを生活の中から聴きとることの必然性を知り、人が生きる姿を目の当たりにし、実習において否応なしにその価値や倫理を肌で感じることの最初の経験をすることになる。このように、実習期間や実習課題の設定が異なることで実習指導内容の差異はあるが、これらの実習はそれぞれに完結するものではなく、継続性をもつものとして積み上げられていくことによって初めて学生一人ひとりの成長が確認できるといえよう。各実習段階について教員間でその特性を把握することのみならず、実習指導者との共通理解の形成が求められていることが浮き彫りになったともいえる。

表Ⅲ - 5 実習タイプと実習指導内容との関連性

項目		受けた	受けていない	計	検定
ア) 実習に取り組む熱意	現場実習	41(66.1%)	21(33.9%)	62(100.0%)	n.s
	実習Ⅰ	23(60.5%)	15(39.5%)	38(100.0%)	
	全体	64(64.0%)	36(36.0%)	100(100.0%)	
イ) 実習に取り組む意思	現場実習	42(67.7%)	20(32.3%)	62(100.0%)	n.s
	実習Ⅰ	22(57.9%)	16(42.1%)	38(100.0%)	
	全体	64(64.0%)	36(36.0%)	100(100.0%)	
ウ) 実習生としてふさわしい服装	現場実習	18(29.0%)	44(71.0%)	62(100.0%)	n.s
	実習Ⅰ	17(44.7%)	21(55.3%)	38(100.0%)	
	全体	35(35.0%)	65(65.0%)	100(100.0%)	
エ) 実習生としてふさわしい態度	現場実習	35(56.5%)	27(43.5%)	62(100.0%)	n.s
	実習Ⅰ	24(63.2%)	14(36.8%)	38(100.0%)	
	全体	59(59.0%)	41(41.0%)	100(100.0%)	
オ) 実習中の健康管理について	現場実習	37(59.7%)	25(40.3%)	62(100.0%)	n.s
	実習Ⅰ	28(73.7%)	10(26.3%)	38(100.0%)	
	全体	65(65.0%)	35(35.0%)	100(100.0%)	
カ) 実習中の生活管理（休みや休日の過ごし方など）	現場実習	25(40.3%)	37(59.7%)	62(100.0%)	n.s
	実習Ⅰ	13(34.2%)	25(65.8%)	38(100.0%)	
	全体	38(38.0%)	62(62.0%)	100(100.0%)	
キ) 自分自身の援助の傾向やくせ・価値観（自己覚知）	現場実習	40(64.5%)	22(35.5%)	62(100.0%)	* *
	実習Ⅰ	13(34.2%)	25(65.8%)	38(100.0%)	
	全体	53(53.0%)	47(47.0%)	100(100.0%)	
ク) 利用者との関係形成・関わり（コミュニケーション）	現場実習	60(96.8%)	2(3.2%)	62(100.0%)	n.s
	実習Ⅰ	36(94.3%)	2(5.7%)	38(100.0%)	
	全体	96(96.0%)	4(4.0%)	100(100.0%)	
ケ) 実習指導者や他の職員との関係	現場実習	28(45.1%)	34(54.8%)	62(100.0%)	n.s
	実習Ⅰ	15(39.5%)	23(60.5%)	38(100.0%)	
	全体	43(43.0%)	57(57.0%)	100(100.0%)	
コ) 他の実習生との関係	現場実習	14(22.6%)	48(77.4%)	62(100.0%)	n.s
	実習Ⅰ	6(15.8%)	32(84.2%)	38(100.0%)	
	全体	20(20.0%)	80(80.0%)	100(100.0%)	
サ) 利用者の特性の理解	現場実習	60(96.8%)	2(3.2%)	62(100.0%)	n.s
	実習Ⅰ	37(97.4%)	1(2.6%)	38(100.0%)	
	全体	97(97.0%)	3(3.0%)	100(100.0%)	
シ) 基本的な生活支援（介護技術等）	現場実習	47(77.0%)	14(23.0%)	61(100.0%)	n.s
	実習Ⅰ	31(81.6%)	7(18.4%)	38(100.0%)	
	全体	78(78.8%)	21(21.2%)	99(100.0%)	
ス) ニーズ把握（アセスメント）	現場実習	52(83.9%)	10(16.1%)	62(100.0%)	* *
	実習Ⅰ	19(50.0%)	19(50.0%)	38(100.0%)	
	全体	71(71.0%)	29(29.0%)	100(100.0%)	

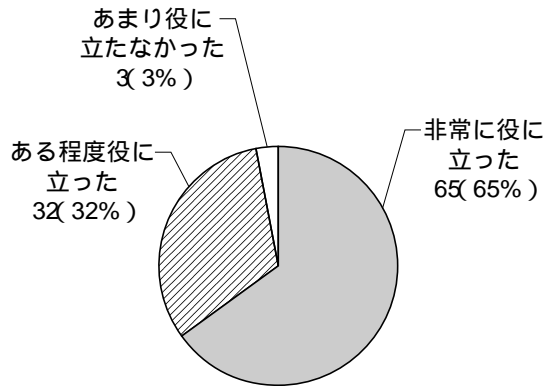
項目		受けた	受けていない	計	検定
セ) 利用者の権利	現場実習	34(54.8%)	28(45.2%)	62(100.0%)	n.s
	実習Ⅰ	19(50.0%)	19(50.0%)	38(100.0%)	
	全体	53(53.0%)	47(47.0%)	100(100.0%)	
ソ) 利用者の価値、倫理	現場実習	43(69.6%)	19(30.4%)	62(100.0%)	n.s
	実習Ⅰ	22(57.9%)	16(42.1%)	38(100.0%)	
	全体	65(65.0%)	38(38.0%)	100(100.0%)	
タ) 援助計画の立て方	現場実習	34(54.8%)	28(45.2%)	62(100.0%)	*
	実習Ⅰ	11(28.9%)	27(71.1%)	38(100.0%)	
	全体	45(45.0%)	55(55.0%)	100(100.0%)	
チ) 面接技術	現場実習	12(19.4%)	50(80.6%)	62(100.0%)	n.s
	実習Ⅰ	3(7.9%)	35(92.1%)	38(100.0%)	
	全体	15(15.0%)	85(85.0%)	100(100.0%)	
ツ) 社会資源の活用や開発	現場実習	34(54.8%)	28(45.2%)	62(100.0%)	*
	実習Ⅰ	10(26.3%)	28(73.7%)	38(100.0%)	
	全体	44(44.0%)	56(56.0%)	100(100.0%)	
テ) 施設・機関の機能	現場実習	58(93.5%)	4(6.5%)	62(100.0%)	n.s
	実習Ⅰ	31(81.6%)	7(18.4%)	38(100.0%)	
	全体	89(89.0%)	11(11.0%)	100(100.0%)	
ト) 法律・制度	現場実習	35(56.5%)	27(43.5%)	62(100.0%)	*
	実習Ⅰ	10(26.3%)	28(73.7%)	38(100.0%)	
	全体	45(45.0%)	55(55.0%)	100(100.0%)	
ナ) チームにおける役割と機能	現場実習	43(69.6%)	19(30.4%)	62(100.0%)	*
	実習Ⅰ	16(42.1%)	22(57.9%)	38(100.0%)	
	全体	59(59.0%)	41(41.0%)	100(100.0%)	
二) 記録の書き方	現場実習	27(43.5%)	35(56.5%)	62(100.0%)	n.s
	実習Ⅰ	12(31.6%)	26(68.4%)	38(100.0%)	
	全体	39(39.0%)	61(61.0%)	100(100.0%)	
又) 実習目標・課題	現場実習	39(62.9%)	23(37.1%)	62(100.0%)	n.s
	実習Ⅰ	23(60.5%)	15(39.5%)	38(100.0%)	
	全体	62(62.0%)	38(38.0%)	100(100.0%)	
ネ) プログラムの内容	現場実習	35(56.5%)	27(43.5%)	62(100.0%)	n.s
	実習Ⅰ	23(60.5%)	15(39.5%)	38(100.0%)	
	全体	58(58.0%)	42(42.0%)	100(100.0%)	
ノ) 実習計画と実習実施状況	現場実習	47(75.8%)	15(24.2%)	62(100.0%)	n.s
	実習Ⅰ	23(62.2%)	14(37.8%)	37(100.0%)	
	全体	70(70.7%)	29(29.3%)	99(100.0%)	

\*p < .05 \*\*p < .01 n.s: not significant

## 5. 実習期間中のスーパービジョン/実習指導がどの程度役立ったか

### (1) 単純集計結果

図Ⅲ-2に示すとおり、実習期間中のスーパービジョン/実習指導がその後の実習にどの程度役立ったかについて、「非常に役に立った」「ある程度役に立った」「あまり役に立たなかった」「全く役に立たなかった」の4件法でたずねたところ、「非常に役に立った」65人(65%)、「ある程度役に立った」32人(32%)であり、これらを「役に立った群」とみなした場合、97人(97%)となり、ほぼ全員が役に立ったと回答している結果となった。



図Ⅲ-2 実習期間中のスーパービジョン/実習指導がどの程度役に立ったか

(2) 自由記述の結果

①役に立った/役に立たなかった点

ここでは、スーパービジョン/実習指導が「あまり役に立たなかった」と回答した実習生3名を対象として、ケーススタディ的に、回答状況を確認しておくこととしたい。

結果については表Ⅲ 6に示すとおりであるが、case146を確認すると、「実習SVが役に立った/立たなかった理由」「実習SVに関する要望・意見」として、「ほとんどSVをしてもらっていないので、役に立たなかった」「施設の人が忙しいから最終日に30分ほどしかしてもらっていないし、記録もその日その日に返ってこなかったので、1日に1回は少なくとも時間をとってほしいと思った」、case159の「実習SVに関する要望・意見」として「もっと実習生の意見を聞

表Ⅲ 6 実習指導が「あまり役に立たなかった」と回答した実習生の回答内容

ケース番号・性別 実習タイプ・分野	実習SVで印象を受けた点	実習SVが役に立った/立たなかった理由	実習SVに関する要望・意見
146 女性 現場実習 高齢者福祉分野	記述なし	ほとんどSVをしてもらっていないので、役に立たなかった	施設の人が忙しいから最終日に30分ほどしかしてもらっていないし、記録もその日その日に返ってこなかったので、1日に1回は少なくとも時間をとってほしいと思った。
159 女性 現場実習 児童福祉分野	児童養護の歴史のお話をしてくださったこと。	実際に個別の自立支援計画を見せてもらい、その子の昔から変化したこと、これからの課題などがわかり、実習を行なううえでとても大切な情報を得ることができた。	もっと実習生の意見を聞いて欲しいと思った。
210 男性 実習Ⅰ 高齢者福祉分野	記述なし	利用者の特性についての指導があったので、コミュニケーションがとれたこと。	スーパービジョンを行なう機会を設けて欲しい。

いて欲しいと思った。」そして case210の「実習 SV に関する要望・意見」として、「スーパービジョンを行なう機会を設けて欲しい」にあるように、基本的に、スーパービジョン/実習指導を行なわれていないことへの意見や要望がだされており、実習生にとって、まずはスーパービジョン/実習指導の時間を確保して欲しいと感じていることが自由記述から確認できる。

## ② 「実習回数に関する意見」との関連性

そこで、「実習期間中のスーパービジョンがどの程度役に立ったか」と「スーパービジョン/実習指導の実施回数に対する意見」との関連性をみると、「あまり役に立たなかった」と回答した学生は「少ない」と回答している学生が多く、ここでもやはり学生は量的にもスーパービジョン/実習指導を求めていることがわかる。ほとんどの学生がスーパービジョン/実習指導が「役に立った」と回答しているなかで、これら3ケースのもつ意味は大きいといえるのではないだろうか。

## IV まとめおよび今後の課題

本研究では、実習指導者のスーパービジョン/実習指導に焦点をあてた基礎的研究と位置づけ、ケーススタディ的にA私立大学を対象として、学生への質問紙調査をもとに、実習中の実習指導者によるスーパービジョン/実習指導の実態を把握し、スーパービジョン/実習指導を展開していく上での現状と課題について検討していくことを目的としたわけであるが、以下の点から現状と課題を整理した。

### (1) スーパービジョン/実習指導の量的必要性

「実施状況」と「実施回数に関する意見」との関連性については、実施回数が多いほど、学生は「適当」と評価し、一方で、「スーパービジョン/実習指導があまり役に立たなかった」と感じている学生はその回数を「少ない」と評価していることから、学生自身としては、質的要素もさることながら、量的にもスーパービジョン/実習指導を求めていることがわかった。少なくとも1週間に1度は学生もその機会を望んでおり、学生自身にとって、そのことがその後の実習を展開していくひとつの目安になっていると考えられるが、実際の学生の自由記述から、実施状況が「毎日」で「適当」と評価しているケースも確認されており、「実施状況」と「実施回数」の関連において、「毎日」をほとんどが「適当」と評価していることを忘れてはならない。学生は慣れない環境のなかで、人間関係を構築しながら実習生として学んでいく期待や不安、緊張などストレスを感じやすい状況にあり、それを表現できる場所や時間の確保、戸惑いや疑問が起きた時に実習指導者が見てくれているという安心できる環境があることが必要であると考えられる。量的な保証があることにより、実習環境や実習指導者と実習生の関係性も整いやすくなれば、さらにスーパービジョン/実習指導の質の向上も期待できることとなる。このように、学生が実

習指導者に話すことで不安を解消しながら、主体的に次の課題に進んでいくことを可能にしていることが、実習をより充実するものとなり、このような環境に学生が身をおくことができるか否かという点においてもスーパービジョン／実習指導を適切に実施していくことへの実習指導者の果たす役割は大きいといえる。

## (2) 積み上げ式実習指導のもつ意味

山田ら(2010)の研究(その1)において、実習期間中におけるスーパービジョン／実習指導内容について、「行った」と回答した内容の割合の比較により、「実習に取り組む熱意」、「記録の書き方」、「実習目標・課題」については「現場実習」よりも「実習Ⅰ」の回答率が高かったこと、「援助計画の立て方」、「社会資源の活用や開発」、「法律・制度」については「実習Ⅰ」に比べて「現場実習」の回答率が高かったことから、①実習教育における導入的指導の必要性、②「現場実習」がよりソーシャルワークを意識した実習指導内容となっていることが示された。このことは本研究において学生が実習期間中に受けたスーパービジョン／実習指導において「受けた」と答えた回答率が高かった項目の抽出やその分析から同様の結果が得られたことと一致しており、その妥当性が確認できた。

これは、スーパービジョン／実習指導をするということが、実習の過程において着実に学生に伝わっていくものであるということを表し、ここでもスーパービジョン／実習指導を行う実習指導者の関わりが改めて注目される。また、初期の実習段階で学生が利用者との関わりを通して自己の未熟さに気づきながらも、スーパービジョン／実習指導を通して、体験から学ぶとはどういう事か、対人援助者に求められる姿勢とはどのようなものかを模索していくことは、さらに自身の課題を具体化し、社会福祉専門職を目指すものとしての意識を深めていく道筋となる。つまり、基礎実習の段階からソーシャルワークに発展する福祉実践者としての学びはすでに始まっているといえる。さらに、松永ら(2010)の研究(その2)において示唆された、実習指導者との関わりから得られる「学びの保証」という安心感をベースに実習生の主体的な学びを展開していくことは、実習生自身が福祉の対象となる利用者と共に感性的に関わる姿勢を形成していくことにつながっていくことも期待できる。これらは、「実習Ⅰ」をベースに「現場実習」へと学生が段階を踏んで実習することが、学生、実習指導者、教員双方にとって効果的に実習を展開し、学生の成長に働きかけていくことと、その継続性を大きく意味づけるものであると捉えることができるのではないだろうか。

本研究はA大学におけるケーススタディではあるが、導入教育としての実習を取り入れた積み上げ式実習教育の持つ意義について確認することができたといえよう。

それらの実現を図るために、学生がスーパーバイザーとしてスーパービジョン／実習指導を受ける意味や必要性を理解する姿勢と、教員や実習指導者の役割として実習タイプの特性を活かしたスーパービジョン／実習指導の展開の仕方について具体化していくことが、今後の検討課題である。学生自らが主体的に学ぶことができる環境に身をおき、学びの過程に視点をのこした実習指

導教育のあり方を模索していくうえで、今後さらに学生と実習指導者双方の関係性、現場と大学との協働、相互の共通理解と指導体制の確立が不可決となるだろう。

なお、本研究は、長崎純心大学の共同研究助成を得て行ったものである。

## 【謝辞】

本研究をおこなうにあたり、ご協力いただいた関係者の皆様に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

## 参考引用文献

- 荒川義子「社会福祉実習におけるスーパービジョンの研究 - スーパービジョンに対する学生の満足度に影響を与える要因について - 」関西大学社会学部紀要、第95号、2003、pp.71-78
- 植田寿之『対人援助のスーパービジョン - よりよいスーパービジョンのために - 』中央法規、2005
- 福山和女編者『MINERVA 専門職セミナー⑭ソーシャルワークのスーパービジョン：人の理解探求』ミネルヴァ書房、2005
- 相澤謙治『スーパービジョンの方法』相川書房、2006
- 加藤幸雄、小椋喜一郎、柿本誠、苗木俊一、牧洋子『相談援助演習 ソーシャルワークを学ぶ人のための実習テキスト』中央法規、2010
- 山田真由美、横山智美、松永公隆、山田勝美、井上由起、毛利宣子「実習施設における実習指導者によるスーパービジョン/実習指導に関する基礎的研究(その1)：実習指導者に対する質問紙調査を基に」純心現代福祉研究 No.14、2009、pp.61-78
- 松永公隆、山田勝美、山田真由美、横山智美、井上由起、「実習施設における実習指導者によるスーパービジョン/実習指導に関する基礎的研究(その2)：自由記述の分析を基に」純心現代福祉研究 No.14、2009、pp.79-92